

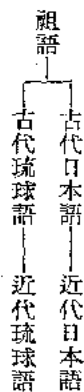
第四章 琉球語と内地方言との比較

支那の小學校では、琉球はもと支那の領土であつたと教へて居るさうである。これは排日のために事實を歪めて居るのだから、取るに足りない。歴史の方は歴史家にお任せするがおよそ國家の勢力關係を知るためには、言語ほどよいものはあるまい。言語の分布圖は即ち國家勢力の分布圖である。然り而して、臺灣は支那語の勢力範圍であり、琉球語は日本語の方言で無いまでも、その姉妹國語である。臺灣の一步手前の八重山諸島の方言でさへ、あまりに日本語的であるのに驚かれる。しかし、今は首里語だけを問題にする。東條さんの「南島方言資料」は、六九五項に首里語を八百一語收めてあるが、この内琉球の特産物たる榕樹、阿旦、福木、クバ、及び八重山熱を除いた残の七九六語について調べた結果、次の統計を得た。

支那語……………	六
琉球獨特のもの……………	三九〇
難解のもの……………	二三九
易解のもの……………	一五一
日本語系のもの……………	四〇〇
標準語と同じもの、又は小さい訛……………	一八七
訛甚しく別語の觀あるもの……………	四二
接頭語・接尾語の附いたもの……………	一二二
意味の違ふもの……………	一六
古語の殘存……………	三〇
内地方言と同じもの……………	一〇三

これによれば、琉球獨特のものと、日本語系のものとは、殆ど同數である。だから、琉球語を姉妹國語と見る説と、國語内の一方言と見る説とは、その根據に於て五分五分である。今までは、どちらかと言へば、琉球語と日本語との共通に人の注意が偏つて居た傾きがあるが、相違もそれに劣らず優

勢なものである。もつとも、獨特の琉球語と言つても、語源に溯れば日本語に歸するはずであるが、この事は、琉球語を姉妹國語と見る事を妨げるものではない。又、琉球語の歴史を溯れば益々、日本語に近くなると言つた所で本來、姉妹國語とは祖先の同一を豫想して居るのだから、源に溯るにつれて、近くなるのは當然である。要するに、姉妹國語と言ふも、方言と言ふも、根本の認識に相違は無い。たゞ、程度の差だけである。それだけに、決定は難しいとも言へる。試みに、先輩の所説を見ると、先づ Chamberlain は、



と圖示して、

兩國語の語法を具さに比較すると、語詞論に於ても、措辭論に於ても、根本的一致の存することがわかる。——しかも其の一致たるや、目に付き易い細目の差異と共に、イスパニヤ語とイタリア語との間に存在する關係をつくりである。單語の場合も亦同様である。(日本亞細亞協會々報)かういつて、彼は、琉球語を日本語の姉妹國語と斷定した。次に、伊波普猷氏は、

Chamberlain がいつたやうに、これらは國語の方言と呼ばれるには、餘りに變化し過ぎてゐるやう

にも思へる。もしこの程度の開きのあるものを國語の方言と呼ぶならば、フランス語やイスパニヤ語やポルトガル語などのやうな獨立言語も、その國籍の如何に拘らず、どれか一つの方言と稱せられて、現在千五百もあると言はれる世界の獨立言語の數は、ずつと減少するに違ひない(國語科學講座、第五輯)

かう言つて、姉妹國語說に賛意を寄せて居る。方言說の方の代表者は東條さんである。「國語の方言區劃」には、

同一の祖語から分れたものであり、かつ同一國家内に行はれて居る言葉なる限り、著者の如きは之を國語の一方言と見たい。

と、僅か二行で、簡単に片附けて居る。しかし、同一の祖語から分れたといふ事實は、其儘、姉妹國語說の論據ともなる。又、同一國家云々は、政治の側からの演繹で、言語の側からの歸納でないから、政治家ならぬ言語學者を満足させるには足りない。私見では、音韻については姉妹國語說に分があり、文法と單語については兩說五分五分であり、從つて、音韻・文法・單語の綜合については、姉妹國語論者の方に得點が多いと思ふ。



次に各項について説明する。

(一) 支那語。てウチイ(軍鶏)伊波さんの補註には、*Garuchin* 支那語の鬪鶏ケンケイとある。石山福治さんによれば、鬪鶏の北京音は、*ou chin* である。ハイツキ(海賊、*hai zai*) マーザー(あげた、麻子、*ma zai*) サークー(土鍋、*sha kuo*) ヘーデー(追刺)伊波さんによれば、*he de*「混雑、騷集」に「はへらい、人をこなし氣任するを云、唐音也、體懶と書」とある、ターリー(父)これはターレーン(大人)の訛であると言ふ。北京音では *ta* である。

琉球語に含まれる支那語は、長崎方言中のそれに較べて、遙に少ない。これは支那と琉球との交通が、支那と長崎とのそれ以下であつた證據である。ただし、私は支那語の方は不案内である。支那語、特に福建音に精通した人が見たら、もう少し收獲があるかも知れない。但し、笥子コクリ、將棋オウゴ、懸問ケンモンのものは省いた。

(二) 琉球獨特。動植物名に特殊のもの、多いのは全國方言一般の傾向であるが、内地には殆ど異名が無いのに、琉球に限つて、獨特の言葉を使ふ場合がある。殊に、それが基本語彙である場合には、質的に重要視してよい。てーダ(太陽)ニシ(北)トー(平地)カキガ(男)カラサ(髪)ガマク(腰)サバ(草履)等、その例である。

諸島の明かなものでは、ヤマスク(山底、谷)カーススハイユー(柏の葉魚、ひらめ)アミヌク(雨の子、ぼうふら)カチミンシ・ーリー(隠れなさい、隠れんぼう)ハシル(走り、戸)などがある。

(三) 標準語と同じもの。精密に同じものは殆ど無いと言つてもよい位である。琉球では、オ列の音は凡てウ列となり、エ列はイ列となり、キはチとなり、長音が多く、*hi di shi* 等の音がある。是等の法則的なものを度外視しても、尙訛は多い。その訛が大きくなれば、次の項に分類される。

(四) 訛甚しく別語の觀あるもの。モー(野)ヤーン(來年)マルチャ(翅)アング(油)ナীগ(土産)等。この項は少ないのが當然である。なぜなら、訛が大きくなれば、語源不明、従つて、「琉球語獨特」と見なされるから。

(五) 接尾語の附いたもの。琉球語では、動物名にアーを添へる。又、動詞にアーを添へて、「何々する人」といふ意味の言葉を作る。

(六) 意味の相違。アシジャ(下駄)フとギー(人形)ヒンヤ(足)クシ(背)等。

(七) 古語の殘存。これは全部擧げる。クズ(去年)イリエー(夕方)タムい(堀)クガニ(金)ナシジャ(銀)ユクシ(よこし、虚言)マジムン(化物)コーレーグシュ(唐辛、高麗胡椒)ハベル

(蝶、カハビラコの訛か)とジ(妻)ンマガ(孫)ワラビ(子供)クスシ(醫者)ザース(僧侶、座主)ハファイ(はふり、神官)カク(かこ、船頭)フク(肺、ふくふくし)ハナヒエン(くしやみする)ナエグ(敷)チン(きぬ、着物)シシ(肉)マカイ(まかり、飯茶碗)ゲー(かひ、匕匙)ホーカ(輕業・手品、放下)つと(土産)アタラシ(惜しい)イラーシ(いらす、貸す)ヌラーユン(のる、叱る)アカリン(あかる、別れる)シクギン(しへたぎる、いぢめる)の外にも有るがそれは内地の方言にも共通したものである。琉球獨特の古語と言へば、以上の三十語だけ、割合にして四パーセント弱である。内地方言にもある古語をも加へれば七十三四語、割合にして九パーセントとなる。こゝで言ふ古語は元祿語を含むものである。奈良朝・平安朝に限れば、それだけ少なくなる。此内、高麗胡椒、ハベル、孫、ハファイ、カク、ケーの類語は内地にある。

(ハ) 内地方言との共通。これは本稿の主要題目である。

1 ナガシ(梅雨)鹿兒島・宮崎・熊本・長崎・大分・高知にある。四國全部・北九州(宮崎・鹿兒島以外)ではナガセといふ。尾張河和町では、上川の頃降りつゞく雨をナガセ、又はボンナガセと言ふ。近江滋賀郡のナガセは長雨の如くに降るとあつて、要領を得ないが、靜岡縣東部では、長く降る雨をナガサアといふ。又、風の名にも、ナガシ、ナガセがある。その方向は所によつて

いひ、或ひは西南の風(安房、八丈島、駿河安倍郡、秋田縣平澤町、越後出雲崎)といふ。上總君津郡のナガシは五月頃吹く南風とあり、岡山縣邑久郡のナガセは夏吹く強い東風とあるから、梅雨を意味するナガシ、ナガセと同源である事は確である。

2 *Te nu keda*(南風)ハエの訛。九州全部・島根・山口・廣島・愛媛にある。

3 ネー(地震)ナキの訛。武烈紀(那爲)以來の古語である。伊呂波字類抄・易林本節用集・書言字考の頃を通じて、京都で使はれてゐた。但し、慶安頃の京都ではナへと訛る人もあつた。(かたこと)。今、鹿兒島・宮崎・大分でナエ、山口・廣島・愛媛でナイ、信濃でデナイといふ。昔は、盛岡や甲斐にも在つた(御國通辭・裏見塞話)

4 ユサンで(夕方)九州六縣(大分縣はユウサのみ)・山口・岡山・鳥取・近畿・北陸・美濃・尾張・長野・神奈川・千葉・山形で、ユウサリ、ヨウサリ、ヨサリ等といふ。薩摩鎮西郡ではユサイモデといふ。

5 チヌーヌニル(一昨夜)おとゝひの夜をキノウノヨル、又は、キノウノバンと言ふ所は九州六縣(佐賀不明)・中國五縣・四國三縣(徳島不明)・和歌山・播磨・淡路・佐波・甲斐・靜岡・岐

阜・愛知・關東（栃木不明）にある。下北半島ではキナノバゲ。

6 アギ（陸）周防柳井町で、海に對して陸をアゲといふ。富山市在のアゲは岡とある。

7 マツツジ（山頂）官良さんの「探訪南島語彙稿」にはマツツジとある。マは美稱だらう。播磨家島・島根・山陽道・香川・福岡・大分・長崎で、ツジ、又はヤマノツジといふ。薩摩では、例の入聲で、ツッ、又はヤマンツッといふ。ツジはテッペンと同じく頂といふ意味で、必ずしも山のそれには限らない。「木のツジ」「錐のツジ」「頭のツジ」などとも使ふ。「西鶴織留」に「辻のぬけたる葛笠を被き」とあり、「好色一代女」に「秋の小袖ゆるし色にして惣塵子、此辻を一つ／＼紙燭にて焦がし抜き」とある。元禄時代の大版辯である。

8 ひラ（坂）青森・岩手・秋田・山形・群馬・東京・神奈川・佐渡・信州・甲斐・駿河・遠江・飛騨・因幡・肥後・薩摩にヒラがある。意味は、坂・傾斜地・山の斜面・山の中腹などをいふ。日向高千穂では傾斜地をサカヘレトコといひ、島原半島では、山腹をヤマンヒラといふ。信濃北安曇郡や肥後南の關町のヒラは緩傾斜地なさうだが、青森縣奥南郡のヒラコは、急な坂又は崖である。仙臺に片平町といふ町がある。一方は平地だが、他の一方は廣瀬川に臨んで、斷崖絶壁を成して居る。かういふ所を、昔の人はカタヒラと呼んだのである。山形縣黒川村のゼンメビラ、

ジャギビラ（共に地名）も急傾斜地である。アイヌ語でも、斷崖をビラといふ。右見今福のヒドヒラ（崖）、近江栗太郡のヘラコ（山川等の極端の場所）も坂のヒラと關係あるか。ヨモツヒラサカのヒラは關係あらう。これは、現代とヨミヂとの境にあるといふから、斷崖絶壁でなければならぬ。

9 ムイ（岡）ムリ（徳之島・八重山諸島）ムーリ（加計呂麻島）ムリッコ（與那國島）などとも言ふ。モリの訛である。青森・岩手・秋田三縣で、岡・小山・塚などをモリといふ。蝦夷の遺物の出る所は蝦夷森、狐の棲む塚は狐森で、地名となつて居る。所が、加賀能美郡御幸村宇今江の西南にある丘陵を狐塚とも狐森とも言ふ（郡誌）とあるから、昔は全國に分布して居たと見える。今は日本の南北兩端にだけ残り、方言圏論の好例を成してゐる。

10 とー（沖）「探訪南島語彙稿」にトとある。奄美大島では、島と島との間をタナカといふ。肥前上五島では灘をト、又はトヤといふ。「志白岐下」「江の島ドヤ」「平島ドヤ」などの地名がある。周防柳井町では、沖のトナカといふ。わだ中と譯してある。日向兒湯郡新田村の民謡に「沖のとなかに鳴る鈴下げて、鈴の鳴るときや出てござれ」、又は、「沖のとなかに茶屋町立て、上り下りの船を待つ」といふのがある。これは不可能を歌つたされ唄である。伊豫周桑郡の民謡に

も、「沖のとなかの三本竹は、産ます竹かや子がさかん」とある。ただし、日向も伊豫も今は廢語であるらしい。「應神紀」の「由羅のとの斗那加のいくり」のトナカが足である。

- 11 マヤー(猫) マヤ、マユ、ミヤー、メー等と言ふ所もある。肥後でマイ(菊池郡) マラー(鹿本郡) ミャヲ(菊池) ミャーミャー(鹿本) ミャン(臺北) 等といふ。鹿兒島では、猫の鳴聲をミャン／＼といふ。英語のミュー／＼を思出す。土佐幡多郡では、猫の幼な言葉をミイといふ。これも鳴聲から來たもの。

- 12 クラー(雀) 熊野を中心とする奈良・三重・和歌山の三縣に、イタクラといふ言葉がある。阿波の祖谷にもイタクラがある。雀の總稱とも、その一種であるとも言ふ。

- 13 ターシナ、ターシミヤ(田螺) 八重山では「ターむーナ」といふ。タミナ(島原半島・天草・薩摩・大隅)の訛である。タビナ(日向諸縣・薩摩)といふ所もある。

- 14 アタビチャ(蛙) アタビキヤーの訛。南島には動物名にア、又は、アーを添へる辭がある。ガラサー(鴉) ウナー(海菜) ビーバー(蛇) クーパー(蜘蛛) サギヤー(蟹) ヌマー(蛋) ミザ(蚯蚓) 等、アタビチャもアタビチが本體である。ビキ(奄美大島) ビッキ(名瀬町) ビキヤ(奄美大島) ビッキヤ(名瀬町) ビーチャ(喜界ヶ島) と言ふ所もある。九州全部・伊豫青

島・熊野川の流域に屬する奈良・三重・和歌山の三縣でも蛙をビキといふ。東北(福島以外)・宇都宮・越後・近江ではビッキ、越中五ヶ山ではビク、信州下伊那ではヒキタ、土佐ではヒキ、ヒキト、ヒキンド、山陽道ではヒキといふ。

- 15 アークーズ(蛸蛤)「混效驗集」(三百年前の琉球語の辭書)にはアケツとある。内地では、九州と東北にあつて、方言周圍論の好例を成して居る。所によつて訛が多い。アーク(仙臺) アキツ(豊後) アキユース(日向) アケーズ(肥後) アケ(仙臺・山形) アケゴ(山形) アゲジ(岩手・秋田) アケス(大隅) アケツ(秋田・岩手・宮城・福島・茨城・肥後・日向) アケドリ(豊後) アケベロ(鹿兒島) アゲン(山形) アッケ(山形) アンケ(山形) 等。

- 16 ギンシャシ、ジチトシ(虱卵)。ギーカシ(絲滿町) ギサシ(與論島) ギンチャーシ(國頭郡) ギッサ(宮古島) カシ(名瀬町) 等とも言ふ。内地では、キカゼ(和歌山市・壹岐) キサザ(當陸) キサシ(種子ヶ島) キサジ(東京府・佐渡・金澤・和歌山) キサゼ(和歌山) キサダ(下總) キサレ(紀伊) キビス(信州) キラザ(水戸) キラジ(石川) キラズ(當陸) ケガシ(淡路・阿波) ケラジ(能登) 等といふ。足利市のキサダは虱、栃木縣芳賀郡のキサツ、和泉々北郡のキカゼ・キカジは毛虱と報告されて居る。これは再調査の必要がある。「新撰字鏡」には、蟲局に幾と書い

た字を、志良彌とも支加佐とも訓じてゐる。「倭名抄」には、同じ字を岐佐々と訓じて虱子也と註し、虱をば之良美と訓じて齧人蟲也と註して居る。「伊呂波字類抄」には、蟲類に幾の字をキササともキサシとも訓じ、虱子也と註してある。易林本「節用集」にはキサシ、「書言字考」にはキサヤとある。これによれば、キサザ、キササ、キサジの順序に轉訛した様に見える。たゞし、後の二つは久しい間併用されたい。「言海」「大言海」には、キササを虱の一名としてあるが、これは虱の卵の誤である。「大日本國語辭典」には虱の子とある。

豆腐のおからは虱の卵によく似てゐる。兩方ともキラズと呼ばれるのは關係があらう。キラズは、キサジがキシジを通じて訛つたものと認められる。川越市では、ありまきをキラズといふ。倭名抄に、酒蠟を佐加岐佐々と訓じてある。今、醬油の上に浮ぶ白いかびをサザ(鳥取・山形・出雲・石見)ササ(石見)ササビ(隠岐)サシ(石見)サス(隠岐)サダ(出雲)などと言ふのは、キサザの上略である。

17 フウチバー(よもぎ)フツバの訛である。フチバー(國頭郡)フち(石垣島)フつ(喜界が島)等とも言ふ。フツは九州全部にあつて、外には無い。

18 テンシヤーグー(風仙花)テンシヤグ(國頭)テンザク(宮古島)とも言ふ。トッサゴ(薩摩)

トッシヤゴ(日向・薩摩)トビグサ(大分市)トビシヤ(大分市)トビシヤク(大分市)トビシヤコ(土佐幡多郡・豊後)トビシヤゴ(豊後・日向)トビシヤコー(大隅寶島)トッサゴ(薩摩)トッシヤゴ(天草)の系統である。

19 フーロー(ささげ)豊後でフロウ、日向でフロといふ。「物類稱呼」の頃は、上州・總州・信州にもフロウがあつた。

20 ナーパ(茸)國頭郡や八重山では、ナバといふ。ナバは石見・山陽道・伊豫・土佐・九州(全部)にある。

21 アンマ(母)「混效驗集」にはアム(百姓の妻)とある。「探訪南島語彙稿」にはアジマーとある。内地では、越中・越前・土佐幡多郡にアンマがある。石垣島の土族は母をアッパといふ。これも青森・岩手・秋田三縣にある。その他、アハ(秋田)アバ(津輕)アバ(津輕・岩手・秋田・山形・新潟・石川・若狹)アッパ(岩手・秋田)アヒー(壹岐)アホ(肥後・鹿兒島)アボ(薩摩)アボ(薩摩)アボン(鹿兒島)アン(八重山郡黒島)アボア(波照間島)等がある。古川古松軒の「西遊雜記」(天明)に、薩摩國苗代川鹿屋村は朝鮮からの歸化人の部落である事を記した後に、「言語今に朝鮮言葉参るなり。母をアバ、父をムマといふなり。此外聞なれぬ言葉多かり

し」と書いてある。しかし、母の朝鮮語はオミ、父のそれはアビである事、又アビは東北や北陸道にもある事を知つたら、かうは書かなかつたらう。要するに、これらは古語のオモの子孫に外ならぬと思はれる。

- 22 アヤー（母）樺太・北海道・秋田・山形・越後で、母をアヤと言ひ、佐渡ではアヤンと言ふ。九州には見當らない。前のアッパと共に、方言圏圖論の一例である。

- 23 どシ（友人）佐渡・出雲・九州全部にある。佐賀縣ではカタイドシ、周防ではドーシンといふ。
24 ユタ（巫女）イタの訛である。イタは巫女の古語。「源平盛衰記」靜憲熊野詣事の條に、「母にて侍りしものは夕霧の板とて、山上無隻の御子、一生不犯の女にて候ひし程に」とある。もと津輕藩南部藩に屬した地方で、口寄せの巫女をイタコと言ふのは是である。方言圏圖論の一例。

- 25 メース、メーサー（おべつか者）「書言字考」に求婚をマイスと振假名してある。現在マイス系の有る所は九州全部・愛媛・滋賀・三重・尾張・長野・新潟・山形・茨城の十六縣である。

- 26 フェーナムン（不精者）宮古島ではフェーナムといふ。内地では、フヨウゴロ（小豆島）フュトサレ（筑前朝倉郡）ヒユミナシ、ヒユムナシ、ヒユンナシ、フユジ、フユナシ、フユミナシ、フユムナシ（以上島原半島）フュージ（肥後）フューズラ（肥後）フユシゴロ（薩摩）などがある。

る。以上、何れも不精者・怠け者の意である。長門阿武郡でも懶惰をフヨウといふ。語源は不用、不用人である。島原半島では諺の「怠者の日忌無し」と混同したらしい。

- 27 タチシバ（唇）宮古島・鹿児島・宮崎ではスバ、熊本・長崎・佐賀・大分・福岡ではツバといふ。この言葉は九州以外には無い。

- 28 ウとゲー（願）古語。オトガヒの訛。東北全部・千葉・長野・山梨・奈良・大阪・中國（岡山以外）・豊後にある。

- 29 つビ（臂）周防と四國全部とではツベといふ。スボ（紀伊黒江町）タンベ（出雲能義郡）ズベ（豊後東國東郡）デンボ（横須賀市）もこの系統だらう。

- 30 ツンシ（膝）奄美大島では「つブシ」、八重山では「つブス」と言ふ。内地にもチュブシ（薩摩）ツブシ（阿波・伊豫・筑前・豊後・下五島・壹岐・對馬・種子ヶ島）ツンブシ（薩摩）などがある。

- 31 アド（踵）大分・宮崎・島原半島・熊本にある。鹿児島縣ではアドド、アトジイ。

- 32 イリキ（頭垢）イロコ（倭名抄・易林本節用集・伊呂波字類抄・書言字考）の訛である。東北でウロコ（奥南部・盛岡・秋田・昔の仙臺）ウルコ（秋田）イロコ（秋田）オロコ（宮城）とい

ひ、南九州でウロコ（日向児湯郡）イコ（鹿児島市）イリコ（種子島）ウルコ（種子島）と言ふ。方言周圍論の一例である。鹿児島県のイコは、イリコがイイコを通じて成つたもの。

33 ワチクサー（腋臭）福島市・常陸北相馬郡でワキクサ、上總でワキグサといふ。

34 ゲーチ（風邪）ガイキ（咳氣）の訛。能登・福井・美濃・三河・丹後・兵庫・和歌山・鳥取・岡山・佐賀・島原・熊本・宮崎・鹿児島にある。「榮華物語」に、「がいきなどいふ事をせさせ給ひて」とある。昔は盛岡にもあつた。

35 クンヂヤ（癩癧）クンヂヤ（國頭郡）クンキヤ（宮古島）クンキヤ（八重山）クジキ（奄美大島）とも言ふ。コジキの訛。慶長八年の長崎版口葡辭書に、九州方言コジキ（癩病患者）がある。幕末の「筑紫方言」にもコジキ（癩癧）がある。今、コージキ（島原半島）コジキ（信州南佐久郡・種子島）コシキ（鹿児島）コシッ（日向諸縣・薩摩）などと言ふ。

36 ククツ（癩癧）「書言字考」にクツチャミ（癩癧）、易林本節用集にクツチ（癩癧）、慶長の日葡辭書にクツチとある。今、島原半島で、クツジモチ、又はクツクツと言ふ。

37 イシ・ー、ンシ（着物）北は奥羽（青森以外）と下總、南は日向諸縣郡・薩摩・種子島等にイシ・ウ、又はイシがある。方言周圍論の一例である。慶長八年の日葡辭書には卑語とある。

33 ドーブク（羽織）「書言字考」に、「道服 今羽織と云ふ。往古騎馬の客之を服し、塵埃を避くる用に充つ、故に名づく」とある。今、岩手・秋田・山形・富山・越前・飛騨・滋賀・丹波・三重・播磨・鳥取・安藝・土佐にドウブク、又はドンブクがある。ドンブクは慶安頃の京都訛であつた（かたこと）。豊後北海部郡のシヤアは半纏をローブクといふ。一般に、ドウブクの意味は綿入羽織といふのが一番多い。細袍（飛騨・三重・因幡）ねんねこ（播磨）が之に次ぐ。丹波のドンボクは袖無羽織、越中のドーブクは脊に綿の入つたる半臂に似た物、近江・安藝のは綿入半纏とある。

39 イービガニ（指輪）宮古島では「ゐビガニ」といふ。「好色一代男」に、「手に指がねをさゝせ、足には革踏をはかせながら寝させて」とある。今、イビカネ（香川）イビガネ（長崎・福岡・廣島）イッガネ（日向諸縣・薩摩）と言ふ。

40 ランガサ（洋傘）鹿児島でランガサ、又はダンガサといひ、日向諸縣地方でダンガサといふ。

41 シチタ（雪駄）セキダの訛。岩手・秋田・埼玉・東京市・佐渡・山梨・金澤・岐阜・若狹・近畿（滋賀不明）・石見・岡山・山口・徳島・高知・佐賀・福岡・長崎・熊本・大分等にある。「かたこと」に、「雪駄を、せきだといふはわらしといへど、苦しかるまじき歟。せちだ、せつたなど

いふは耳に立てあし」とある。

- 42 カテモン(副食物)岩手縣遠野町でカテモノ、肥後・日向諸縣・薩摩でカテモンといふ。鹿児島縣ではカテムンと言ふ所もある。方言周圖論の一例である。

- 43 シチンジュ(便所)雪隠所の訛。雪隠系は、東北(青森・宮城以外)・千葉・三道(山梨以外)・近畿全部・中國全部・四國全部・九州(日向不明)にある。關東地方には不思議に缺けて居る。

- 44 カー(井戸)島根・廣島・山口・愛媛・大分・豊後・五島・天草・薩摩・種子ケ島でカワといひ、伊豆大島でカーといふ。掘抜井戸の發明は近世の事で、それ以前は自然の流れを利用したのである。

- 45 カマ(竈)山形・茨城・八丈島・遠江・美濃・大分・長崎・薩摩・日向諸縣地方にある。佐渡では、オカマ、又はオカマサン、山口市附近ではオカマサマといふ。備後東條町では土間にあるのをオカマサマ、茶の間にあるのをクドといふ。

- 46 ハガマ(釜)茨城・飛騨・伊勢・和歌山・兵庫・中國全部・四國全部・九州(日向不明)にある。「好色一代男」「日本永代藏」には羽釜とある。ハとは釜の鐙のこと。

- 47 ミシゲー(杓子)飯ガヒの訛。「伊呂波字類抄」に、匕、木刀、匙をカヒと訓じ、「所以取飯也」

と註して居る。また同書に木刀をイヒカヒとも振假名してある。易林本「節用集」には飯櫃とあり、「書言字考」には飯匙とある。慶長八年の「日葡辭書」に「イイガイ 飯を椀にとるに用ゐる匙 下の語」とあり、「好色一代男」に「野秋は飯を盛る筈と定めければ、遂に飯がひ知らぬとは」とある。いま、イイギヤ(日向)イーゲー(日向)ヨーガイ(三河・伊勢)メシガイ(土佐幡多郡)メシギヤ(長崎縣宇久島・天草)メシゲ(日向諸縣地方・薩摩)メシガー(種子ケ島)ハンガイ(能登・美濃)などと言ふ。昔は、飯や汁を盛るのに、天然の貝を利用したのである。だから、杓子のことをカヒと言ふ。妻が夫より年上なことを、青森・秋田・岩手・宮城四縣でヘラ(筥)と言ふが、それを福岡市でイガイマシ(飯匙増)と言ふのも面白い。

- 48 ソーキ(筥)「書言字考」にセウキがある。セウは竹冠に肖の字、キは筥の字を書いてある。飯器とあるから、飯を入れる筥かと思ふ。九州全部・近畿(京都市・滋賀・奈良・三重)・若狹・岐阜ではシウケ、又はシウケと言ふ。富山・石川・越前・京都府・兵庫・中國(廣島以外)・高知・佐賀・長崎・鹿児島ではソウケといふ。群馬縣や埼玉縣のシウギはうどん等を容れる平筥である。足利市や信州南佐久郡のシウギも同様かと思ふ。

- 49 すーノー(篩)「書言字考」に「水瀝スエリ 正ニハ瀝——ト曰フ。本名篩斗。事名義集ニ見エタリ」

とある。名古屋・播磨・但馬・因幡・石見・岡山・廣島・徳島・愛媛・高知・筑後・長崎に、ス
イノウ、又はスイノがある。青森・山形ではスノ、佐賀縣ではシイノといふ。埼玉縣幸手町のス
イノウは味噌こしとある。

- 50 ハンジリ(鹽)「世間胸算用」に「半切に移し並べたる蕃椒」とある。今、秋田・山形・福島・
山梨・加賀・滋賀・和歌山・但馬・石見・岡山・山口・高知でハンギリ、佐賀・鹿兒島でハンギ
イと言ふ。

- 51 ユイ(篩)奄美大島ではユリといふ。揺り」である。肥前島原半島でユル、タカユル、タケユ
リ、イトユリ等といふ。

- 52 タグ、タীগ(手桶)タグの訛。「増補下學集」「書言字考」に、擔桶をタグと訓じて居る。岩
手・宮城・山形・千葉・美濃・三河・若狹・滋賀・京都市・大阪・但馬・鳥取・石見・山口・香
川・高知・九州全部でタグ、又はクンゴといふ。出雲・備中ではタガ、埼玉縣土合村ではクンガ
と言ふ。「物類稱呼」(安永)に、

畿内にて、たごといふを、江戸にて、になひといふ。……又「たご」とはをけの惣稱也。上か
たにては、なにたごかたごといふ。たごとはかりいふ時は、畿内西國共に水桶也。東國また豊

後にては「たご」と云ふは糞器をいふ也。

とある。關東人はタグと聞くと、直ぐ肥桶を聯想して鼻をつまむので、吾山先生、辯明大いに努
めたわけである。文政の「浪花聞書」にも「たご 荷桶也」とある。

- 53 チョーパン(餅)奄美大島では一升餅に限りキョーパンといふ。京判である。甲斐の餅日は他
國と甚だしく違つて居るので、普通の一升餅は特にキョウバン、キョウバンマス、キョウマス等
と言つて、區別して居る。常陸久慈郡でも、一升餅をキョーバンマスといふ。昔は所によつて餅
日が不統一であつたから、京の餅とことわる必要があつたわけである。

- 54 デエはー(すり鉢)。ダイバ(黒島)ダイバー(石垣島)ダイバー(與那國島)デーバ(波照間
島)レーワー(絲滿町)など云ふ。ライボンの訛「運歩色菜集」に「搗盆 禮家曰搗粉鉢」と
あり、「かたこと」に「搗鉢を搗盆ともいふ也」とある。「物類稱呼」に奥州方言ライパンがある。
近頃の方言には無さ。

- 55 チューカー(土瓶)。チュカ(奄美大島)チュウカ(國頭郡)チチカー(八重山)とも言ふ。日
向・薩摩でチ。カ、島原半島でチ。コといふ。「物類稱呼」土瓶の條に、「薩摩にて、ちよかと云。
同國ちよか村にてこれをやく。ちよかはもと琉球國の地名なり。其所の人薩州に來りてはしめて

制るゆへに「ちよか」と名づく」とある。しかし、チヨカは茶壺 (cha hu) の唐音だといふ説もある。この説が正しいとしても、琉球と九州 (長崎又は薩摩) とどちらが先かといふ事が次の問題となる。この先後は容易に決定しがたい。

56 シュク (机) ショクの訛。卓の宋音であると言ふ。易林本節用集、書言字考に卓子をショクと振假名してある。「日本館譯語」に卓を「少谷」と譯してある。茨城・千葉・神奈川・佐渡・山梨・伊豆・美濃・尾張・和歌山・岡山・大分・宮崎・長崎・鹿児島にある。備後ではショクデ、一 (点臺) といふ。常陸・佐渡では、ツクエと複合してショクエとも言ふ。信州川中島ではシクイ、近江大上郡ではショクケイ。栃木縣のショクバ (机場教室) も面白い。

57 イリ (錐) 郡城市・種子ヶ島でイリ、薩摩・日向諸縣地方でイイといふ。天草でイギイ。島原半島でイギリと言ふ。

58 チンロー (秤) キンリョウ (斤量) の訛。大和吉野郡・兵庫・鳥取・島根・広島・山口・愛媛・福岡・大分にある。キンリョウ (佐賀) キンヂウ (佐賀) キンジョ (薩摩) キンジョウ (播磨・廣島・島原) キンチョウ (和歌山) といふ所もある。昔は越後にもキンレウがあつた。

59 バンジョ、イガニ (曲尺) 番匠金である。出雲・石見・日向・薩摩にある。

60 ダビ (葬式) 津輕・秋田・山形・上總・信州下高井郡ではダミ、尾張知多郡ではダンビ、またはダンベといふ。火葬には限らない。「下學集」に「茶毘」二字共唐音葬送之義」とあり、易林本「節用集」にも「茶毗 送喪」とあり、また「葬 茶毘義」とあり、「下學集」の増補 (寛文) にも同様にある。近世はダビと葬式とを全く同じ意味に使つた事が判る。棺をダビと言ふ所もある。

61 ガシビシ (凶年) この言葉は今日、四國・九州には無いが、本州ではガシ (岩手・宮城・滋賀・石見) ガシン (山形・若狭・丹波・三重・兵庫・因幡・石見・岡山・広島) ガシドン (仙臺・福島) ガシンドシ (越中・飛騨・伯耆) 等といふ。餓死をガシンと訛るのは慶安時代の京都訛である (片言)。高松市では食ひしんぼうをガチといひ、栃木縣芳賀郡逆川村では、食物をがみ (食ふ人をガシマケ (マケは一族の意) といふ。前者は餓鬼の訛かも知れないが、後者は確に餓死の化石的存在である。

62 クチムン (薪) タキモノの訛。山形・佐渡・富山・石川・愛知・兵庫・鳥取・四國全部・筑後・熊本・宮崎・鹿児島などにある。

63 ヤーチュン (灸)。ヤチュ (大嶋) ヤツッ (宮古島) ヤツツォー (八重山) と言ふ所もある。ヤイトの訛である。「伊呂波字類抄」にヤイトウとあり、「かたこと」に、ヤイト ヤイトウ、ヤイ

との三つを擧げてある。「出世景清」「浪花聞書」にもヤイトがある。いま、九州（佐賀以外）徳島・山陽道全部・石見・四幡・兵庫・大阪市・京都市・美濃・静岡に、ヤイト、又はその訛がある。昔は江戸や盛岡にもあつた。（匡子漢文、御國通辭）

- 64 ミギリ、ミジリ、ニジリ（右）盛岡でミギリ、近在の飯岡村でニギリと言ふ。「握り」を聯想したらしい。右手で握るから。

- 65 イミ（夢）イメの訛。萬葉集に伊米とある。私は訛言はあまり集めて居ないが、とにかく、佐渡・加賀・廣島・周防にある事だけは判つて居る。

- 66 カナシヤ（愛らしい）宮良さんの採集ではカナシヤンである。東北地方でカナシイ（津輕）カナシガル（盛岡）カナジム（仙臺）といふ。山形縣庄内では「母をカナジウム」などと使ふ。戀しがる意。この言葉は東北と南島以外には無い。方言周圖論の一例である。

- 67 シンソーサ（愛らしい）九州全體にムゾイ系があるが、意味は愛らしい（福岡縣以外全部）と可哀さうな（福岡・大分・宮崎・熊本・鹿児島）の二種ある。東北地方のムゾイは六縣とも「可哀さうな」の意味である。常陸のモジコイ、上野のモチケイは「可愛い」といふ意味である。このムゾイ系は方言周圖論の一例である。

- 68 ウとルシヤ（恐しい）「混效驗集」にはオトロシヤとある。九州（熊本以外）・四國全部・中國・近畿にオトロシ、又はオトロシイ（九州ではオトロシカとも）がある。東は能登・加賀・越中あたりが限りだらう。

- 69 イチャ・ユン（會ふ）八重山ではイコロンといふ。イキアフ（行會）の訛。東北でイキアウ（盛岡）イキヤウ（山形）イケアル（秋田鹿角郡）と言ふ。種子ヶ島ではイッキョウ、長崎縣宇久島ではイッヨク（過去）といふ。

- 70 ユクーユン（休む）「混效驗集」にはユコフとある。イコフの訛。九州全部にあつて、他には無い。九州では、ヨコウ、又は、ヨクウと言ふ。慶長の日葡辭書にも、京のイコウと九州のヨコウとを對照してあるさうだ。

- 71 ナシユン（産む）ナス（宮古島）ナサン（八重山）ナシユリ（奄美大島）とも言ふ。東北全部、越後・茨城・栃木・千葉・八丈島でナスといふ。方言周圖論の一例である。

- 72 ガユン（叱る）福岡・佐賀・宮崎・鹿児島で、ガル（叱る）ガラル（叱られる）といふ。物類稱呼」にも長崎のガラルがある。九州以外には無い。

- 73 ヨムン（數へる）伊波さんの訂正によれば、ユメンである。ユミユン（那覇）ユミユリ（奄美

大島) ユム(宮古島) ユモン(八重山) とも言ふ。内地では、越中にヨムがある。

- 74 クスマユン(糞する) クソマルの訛。古語である。マる(宮古島) マルン(八重山) と言ふ所もある。内地では、マル(岩手・長野・美濃・三河・尾張・石見・肥後・筑前) バリヲツク(仙臺の昔) バル(石見・広島・山口・高知・筑前・宮崎) 等と言ふ。『東海道名所記』に「ばりをつきて」とある。越前坂井郡では、女の立小便をバリヲハシヨルといふ。内地のマル・バルは凡て小便する方である。たゞ、岩手縣釜石町と長野縣上田市附近だけは大小便兩方に使ふ。土佐にも大便の方をバルと言ふ所があると言ふ。

- 75 スクタミユン(暖める) 自他の相違はあるが、「かたこと」に「ぬくともる」とある。慶安時代の京都言葉である。今、茨城・千葉・佐渡・長野・美濃・三河に、スクトメル(他) スクトマル(白) がある。盛岡市では、スクタメル(他) スクタマル(自) といふ。形容詞(暖い) では、「かたこと」にスクトキ、「書言字考」にスクトシがある。今、茨城・栃木・神奈川・中部地方全部・福井・京都市・三重・和歌山・兵庫でスクトイと言ふのが是である。越前ではノクタイ、三重・和歌山ではスクタイとも言ふ。暖いをスクイ、暖めるをスクメルといふ所なら分布は遙に廣いが、今は省く。

- 76 イ、とテ(暫く) イ、トキ(一時) の訛。能登・土佐・筑後・佐賀・大分・薩摩・種子ヶ島にある。昔は越後にもあつた(越後土産) 盛岡ではイ、トキマといふ。

- 77 シカイト(大層) シカリトの訛。山形・福島・茨城・千葉・埼玉・神奈川・高知で、澤山をシカリと言ふ。阿波美馬郡では「シ、カリ雨が降る」などと使ふ。「甚く」の意である。

以上は『南島方言資料』の順序によつたが、以下は順序不同の補遺である。

- 78 ワンチャメーユン(償ふ) ワキマフの訛。富山市在でワンマエルといふ。

- 79 ヤリーン(破れる) ヤレルの訛。甲斐・美濃・周防・薩摩にある。越中ではヤラケル。

- 80 とメーユン(探す) トメルの訛。古語である。出雲・石見・阿波・土佐にある。昔は播磨にもあつた。(物類稱呼)

- 81 ハンニブユン(死ぬ) 伊波さんの補註に「ハンニブユンは、鹿兒島語のはんねぶるを換つたものであらう、沖縄語で使つてゐるのを聞いたことがない。」とある。

- 82 シーバイ、ユスバイ(尿)。シバイ(國頭郡) シバリ(奄美大島) といふ所もある。安藝でイバリ、佐渡・加賀・淡路・石見・広島・長門・土佐でバリといふ。

- 83 ターマー、ダーミ(砂) 盛岡でクメといふ。

- 54 ミナダ(涙) 八丈島中之郷でメナダといふ。メは目、ナダはナングの訛。
- 85 ヒンギーン(逃げる) ヒンニゲルの訛。薩摩や日向諸縣地方ではヒンニグイといふ。
- 86 ギーター(片足跳)。ギッチャー(宮古郡) ギット(中頭郡) ともいふ。内地のギット(備後) ギッチョ(名古屋) ギッチャン(廣島市) に似て居る。中國地方で跛をギットウと言ふのは是から來たのである。

- 87 ケーナ(前膊) カイナの訛。東北(青森・秋田鹿角郡・岩手・宮城)・八丈島・駿河・尾張・近畿(滋賀・奈良・三重・大阪・兵庫)・因幡・出雲にある。大抵腕全體をいふが、因幡のは臂、近江八幡町のは上膊、八丈島のは肩、出雲大原郡のは肩胛骨の邊とある。「伊呂波字類抄」には肘また肱の字をカヒナと訓じ、易林本「節用集」には腕をカイナ、「書言字考」にも腕をカヒナと振假名してある。日本紀神代卷には羽肩ウラカヒとある。

- 88 ミーゾーキー(箕) 美濃母斐郡で竹製の土箕をミジウケと言ふ。シウケもソウキも筈の意。

- 89 クチナ(寝間)「物類稱呼」にある下總のコザ(間房)と同じものかと思ふ。上總のコザは雜居、隱居所、川越市のコザは居間、信州のコザは結間、日向椎葉村のコザは神を祀る間、常陸行方郡

のゴサは婚禮などの節休憩する間、山形最上郡のゴサは奥座敷のわきの部屋、上州館林のゴサは座敷、日向高千穂町のゴゼンは土間の隣の茶の間(爐がある)、長崎縣江の島のゴゼンは玄關を上つた室(昔はこゝに爐があつた)、佐賀鳥栖町、肥後鹿本郡のゴンゼンは疊の上とある。「日本館譯語」に各擧(居座)とある。

- 90 クチナチ(東風) コチブキの訛。東風をコチ、又はコチカゼと言ふ所は九州全部・四國全部・中國(廣島以外)、近畿大部分・尾張・神奈川・千葉・茨城・福島・宮城・岩手・青森にある。江戸でも下總ゴチと言つた。その他、北風、南風、東北風、東南風を言ふ所が稀にある。

- 91 トーマーミ(蚕豆) 壹岐でトーマメと言ふ。唐豆の意。

- 92 ナバンガサ(梅毒) 壹岐でナンバ。南蠻瘡の意。

- 93 フナト(船頭) 壹岐で漁師をフナト。

- 94 アカツチ(曉) アカツキの訛。壹岐でアカトキ、佐渡・種子ケ島でアカツキ、石見でケサアカトキといふ。

- 95 スとミテ(曉) ツトメテの訛。古語。八丈島中之郷でトンメテと言ふ。

- 96 クンド(今年) 八丈島中之郷でコンド。

97 イリチ(鱗)種子ケ島でイリコ、島原半島でイリコ、イロコ、佐賀縣でイイコ、鹿兒島縣でイコ、イラコと言ふ。

98 ヒヨー、ひユー(人足)日傭人足を神奈川、静岡でヒョトリ、壹岐・肥後でヒユトリと言ふ。

99 カランム(甘藷)カライモ(唐芋)の訛。九州全部・高知・愛媛・山口・廣島にある。

100 ひーサーン(冷い)長門・香川・徳島・土佐でヒヤイ、佐賀・鹿兒島・日向諸縣地方でヒヤカといふ。

101 わーナイ(後妻)常陸真壁郡でウハナリ。古語である。

102 フデー(電)岩手縣釜石町でホデリ。

103 メージ(虹)東北全部・關東六縣・越後・長野・山梨・静岡でノジ、上總夷隅郡でヌジ、伊豆大島でヌージといふ。萬葉集、上野の歌の終月、天武紀の虹の系統である。ニジよりも古い。

以上の外、てンガーラ(銀河)に對するアマノガワラ(越後)アマンカーラ(薩摩)アマゴーラ(壹岐)、ハニゲル(翼)に對するハガイ(大阪府)、つと(土産物)に對する藏包みのツト(東北等)な

ど關係ある言葉が若干あるけれども、これ位で切上げる。琉球語と共通する言葉を地方別に合計すると、九州二七六語半、中國一一六語、四國七二語、近畿九二語、三道地方一二五語、關東六三語、東北一〇七語となる。意味や形の甚しく違つたものは二分の一語として計算したのである。次に、縣數で割つて、一縣當りの平均を取ると、九州三九語、中國二三語、四國・東北おの／＼十八語、三道十四語、近畿十三語、關東九語の順になる。東北地方は距離が最も遠いにも拘らず、九州・中國に次いで第三位を占めて居るのは、方言周圍論の正しい事を證するものである。次に、九州を縣別に見ると、鹿兒島五六語半、長崎四八語半、宮崎四三語、大分三五語半、熊本三四語半、福岡三〇語半、佐賀二八語の順である。鹿兒島縣の如きは、調査項目百三語の五割五分を占めて居る。琉球人が鹿兒島を通して日本の國語を學んだ跡は歴然として明である。室町時代・元祿時代の新語は勿論、奈良朝・平安朝の古語の内にも、鹿兒島を通して學んだものがあるだらう。琉球人が最初に日本人と別れた當時のもの」の内に埋没してしまつて居るのではあるまいか、さう考へると、自分が難解として匙を投げた二・三九語(全體の三割)こそ、眞實の寶庫であらう。